

かって言ってやりたい衝動に自分がいることに気付く。

「速達でーす!」も年に一度あるかないかの今の時代。それでも“速達”という手段はまだ残っているじゃないか、ねえ、この曲に登場する“誰かさん(=主人公の恋人)”と、彼に言ってやりたい。



c o l u m n
◀ 1960s ▶

キリスト教と聖書

カソリック、ギリシャ正教、プロテスタント(ルター派、メソヂスト、バプティスト)など、仏教同様、様々な宗派がある世界三大宗教のひとつ。本書で採り上げた洋楽ナンバーに関して言えば、英米主体ということもあり、プロテスタント系が多いといえる。

ゴスペル音楽というジャンルがあるが、その歌詞の内容は『聖書』とりわけ福音書(Gospel)の場面に典拠を求めたものが大半である。R&B シンガーには前身がゴスペル・シンガーで、教会の聖歌隊で喉を鍛えたのちプロのシンガーとしてデビューした人も数多い。

今から約20年前に日本で一時的なゴスペル・ブームがあった。銀座の某宝飾店前に設置されたクリスマス・ツリーの前で日本人の聖歌隊が讃美歌を歌った、という記事を当時読んだ記憶がある。讃美歌の歌詞の全ては『聖書』に基づいており、その背景は時に『旧約聖書』、時に『新約聖書』である。

また、非ゴスペル・ナンバーにも『聖書』の一節からインスパイアされた歌詞が登場することがあり、英米のクリスチャンにとって『聖書』がいかに身近な存在かが判る。

★ 関連曲→ 1957 You Send Me / 1961 Stand By Me / 1963 The End Of The World / 1966 A Hazy Shade Of Winter / 1967 Light My Fire / 1968 The Time Of The Season / 1969 In The Year 2525 / 1970 (They Long To Be) Close To You / 1971 Baba O'Riley / 1978 Y.M.C.A.

1 9 6 1

全米 No.4 / 全英 No.1

BEN E. KING
STAND BY ME



Stand By Me

スタンド・バイ・ミー

Ben E. King

ベン・E・キング

1938-

エピソード

ここ日本でも未だに人気不衰の曲で、CMソングにもカバーを含めて頻繁に使われている。また、アメリカの人気作家ステイヴン・キングの中編小説『THE BODY』(1982)をベースにした映画『STAND BY ME』(1986)の主題歌になったことから、同映画の大ヒットと共に曲もリヴァイヴ・ヒットし、1986年に全米 No.9 を記録。なお、再レコーディングではなく、オリジナル・ヴァージョンと同じものが改めてシングル化されてヒットした。

1950年代後期～1960年代に人気を博したR&Bヴォーカル・グループのドリフターズに1959年からわずか1年間だけ籍を置き、後にソロ・シンガーに転向したベン・E・キングの最大のヒット曲で、R&Bチャートでは4週間にわたってNo.1の座に就いた。もともとはドリフターズのために書き下ろしたものだったが、彼らがレコーディングを拒否したため、ベン自身が歌うことに。一聴するとラブ・ソングに聞こえることから、英語圏では結婚式に歌われることも多い。が、アフリカン・アメリカンの人々が「我々にも公平な権利を」と訴えたいいわゆる公民権運動の萌芽を感じさせる1961年という時代を考えれば、この曲がある種のメッセージ・ソングとして捉えられたおかげでヒットしたこと

も見逃せない事実。さらには、曲の成り立ちには、ある有名なゴスペル・ソングが深く関わっていたのだった。

ストーリー

誰しも、言いようのない不安に駆られて心細い気持ちになることがある。そんな時、ひとりでも自分の支えになってくれる相手がいれば、弱気な気持ちを奮い立たせることができるもの。自分を取り囲む世界がガラガラと音を立てて崩れるようなことがあっても、救いの手を差し伸べてくれる誰かがいてくれる限り、へこたれたり泣いたりしてなんかいられない。自分の支えになってくれる人の優しさを心張棒にして、何とか前を向いて生きていこう。

Stand By Me の

キーワード & フレーズ

(a) the land

(b) stand by me

(c) shed a tear

「ダーリン」。昔から愛しい人を指すカタカナ語として用いられてきた。では、この曲では誰を指すのか。単純に考えれば、曲の主人公の側に寄り添ってくれる愛しい人だ。が、じつはここでくり返し歌われる“darlin’（本来は darling）”は、一種のオブラートの効果となっている。何故か。

じつはこの曲には、元歌がある。「ゴスペル音楽界のキング」、若かりし頃は「ゴスペル音楽界の皇太子」という御大層な異名をとった、アメリカの超有名牧師ジェームス・クリーヴランドが作ったゴスペル・ナンバー「Oh Lord, Stand By Me」である。シカゴを拠点に活動したクリーヴランド師は、高名な牧師として、そしてゴスペル界の重鎮として知られた人物。元歌となった同曲の歌詞

はネットで検索可能だ。そう、この曲は、もともとはゴスペル・ナンバーだったのである。ベン自身もそのことを否定していないから、今さら隠すことは何ひとつないというわけだ。タイトルからゴスペル・ナンバーを瞬時に想起させる「Oh Lord」を取っ払い、さらに歌詞にラヴ・ソング風の味付けをした。それが、オブラートの効果と言った“darlin’”の部分。

英語では、ゴスペル音楽を俗に“God’s Music（神様を称える音楽）”と呼び、非ゴスペル音楽、日常生活の出来事を歌った流行歌の類を、それと相反するものとして“Secular Music（世俗の音楽）”と呼ぶ。熱心なクリスチャンや教会関係者の中には“Devil’s Music（悪魔の音楽）”とキツイ言葉で呼ぶ人も。つまりベンは、神様を称える曲を悪魔の音楽にすり替えてしまったのだ。“darlin’”のフレーズを付け加えて歌った瞬間に。

試しに、「Stand By Me」の“you”の部分を“God”や“Jesus”“Lord”に置き換えてみると——その際、歌詞から“darlin’”をひとつ残らず削除することも忘れずに——あら不思議、そのままゴスペル・ナンバーとして通ってしまう。そしてこれこそが、ベンの狙いだったのだと思う。

クリスチャン以外の人々にも聴いてもらうために、主語をボカして綴られた歌詞や洗練されたサウンドをあえて施したものを、俗に“Contemporary Gospel（現代的なゴスペル）”と呼ぶ。もしもこの曲に“darlin’”のくり返し部分がなかったなら、間違いなくそのジャンルに含まれていたことだろう。ただし“Contemporary Gospel”なるジャンル名はそう古くはなく、この曲が大ヒットしていた頃には、まだその名称が存在していなかった。何せ当時は、レイ・チャールズがゴスペル風のサウンドを従えて R&B を歌った*1 だけで、教会関係者たちに「地獄へ落ちろ！」

★1—その時、“ソウル・ミュージック”が誕生したと言われている